
すいーとぱれんたいん ~ MIWAKO'S SIDE ~

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すいーとばれんたいん〜MIWAKO'S SIDE〜

【Nコード】

N2611F

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

『すいーとばれんたいん』の佐藤刑事バージョンです。佐藤刑事から見たバレンタインデーの出来事を綴ってみました。かなり乙女な佐藤さんになってしまいました・・・

あーもうっ！どうして固まらないのよおっ。

バレンタインデー前日。

キッチンに籠城してチョコ作りに悪戦苦闘していた私は頭を抱えていた。

5日前から毎日チョコを作っているのに、いつこうに上手くいく気配がない。

私ってこんなに不器用だったっけ。

散らかったキッチンであまりのふがいなさに、がっくりと肩を落とす。

こんなことになるんだったら、昨日由美に聞かれた時、素直にSOSしとくんだった。

「美和子、アレ、上手くいきそう?」

由美に聞かれて思わず、

「大丈夫！心配無用よ。」

なんて言っちゃった手前、今さらこんなことになってるなんて、口が裂けても言えない。

まだ時間はある。

あと1日。

明日、大きな事件が起きなければ、定時で退庁できる。

急いで作ればなんとか間に合う。

もし、定時で退庁できなかったら・・・

その時は潔くコンビニにでも買いに走ろう。

とにかく、バレンタインデーは24時間ある。

その間に渡せばいいのだから。

涉くんの照れ臭そうな優しい笑顔を思い浮かべる。

大丈夫。あの笑顔を見るためなら頑張れる。

あと1日。

明日はバレンタインデー。

「おはようございます。」

1課のドアを開けると、中の空気はいつもよりソワソワと落ち着きがない。

バレンタインデーの魔法は1課のイカツイ男たちにもかかっているようだ。

私は挨拶もそこそこに、非番の日に由美と買いに行った義理チョコを配ってまわる。

毎年恒例の、一種の行事ではあるが、男としてはそれが例え義理チョコであってもやはり嬉しいようだ。

もちろん、チョコを配ってまわるその中には涉くんの姿もあった。

「はい、高木くん。義理チョコ！」

私はわざと『義理』の部分強調して言う。

本当は涉くんのチョコだけ中身を本命チョコに変えておくつもりだったんだけど。

昨日作ったチョコが固まらなかったせいで、あえなく当初の計画を変更せざるを得なくなってしまった。

チョコを渡す時にこつそり、「仕事が終わってから本命チョコを渡しに行くから。」って言うつもりだったんだけど。

「おい、高木！邪魔だ！美和ちゃんからチョコを貰った奴はサッサと退ける！」

周りに群がる義理チョコ待ちの集団からの退けるコールに邪魔されて、伝えることができなかった。

しょうがないなあ。後でメールで伝えればいいか。

その時は簡単にそう考えていたんだけど。

そういう時に限って神様は意地悪で。

大きな事件はなかったものの、朝からバタバタと忙しくて、なかなかメールをする暇がなくて。

一通り現場検証を終えて食事を済ませ、午後から一緒に聞き込みに

回る千葉さんと駐車場へ向かう途中で、昼食から帰って来たらしい
涉くんを発見する。

あ、涉くんだ。

今ならあのこと、伝えられるかも・・・

あわてて駆け寄ろうとした私より先に、2つの人影が彼に走り寄る。
驚いたように振り返る涉くんに、その女の子達が何かを差し出す。

あれって確か、交通課の・・・

何か言葉を交わした後で、少し困ったような笑顔でそれを受け取る
涉くんの姿が、私の心にチクンと突き刺さる。

涉くん・・・

私は思わず泣きそうになる。

受け取らないでよ。私以外の女の子から。

それが例え義理チョコだったとしても、受け取って欲しくなかった。
ふいに涙が溢れそうになつて、グツと堪える。

「佐藤さん？佐藤さん！」

千葉くんの声で現実に取り戻される。

「あ、ごめん。杯戸町3丁目だったわよね？被害者の自宅。」

慌てる私に、千葉くんは心配そうに言う。

「大丈夫ですか？俺、運転していきますよ。」

恐らく私が動揺しているのに気付いているんだろう。

「そう？じゃあお願いするわ。」

私はこわばる頬を引き締めて、無理矢理笑顔を作る。

少しでも早くその場から離れたくて、私は急いで千葉くんの後を追
って車に向かった。

車に乗り込み、深い溜息を吐く。

頭の中では、さっきの光景がフラッシュバックする。

涉くんが他の女の子からチョコを受け取る姿なんて、思い出したく
ないのに・・・

彼は、自分では気付いていないかもしれないけれど、人気がある。
スラリと長身で整った顔をしているし、ちょっと頼りないところも

あるけれど、意外としつかりしていて、誰に対しても誠実で、ものすごく優しい。

そんなところに私も惹かれている。

でも、それは私だけではなくて。

由美が言ってたっけ。

高木くん、ああ見えて意外と人気あるのよって。

でも、実際それを間の辺りにすると、どうしてこんなに心が騒ぐんだろう？

男勝りで気の強い私なんかより、あの子達の方が、涉くんにはお似合いなんじゃないかとさえ考えてしまう。

そして、また泣きそうになる。

馬鹿みたい。

私、いつの間にかこんなにも涉くんの事、好きになってたんだ。

今更ながら思い知らされて、唇の端でつい苦笑してしまう。

切なさに打ちのめされそうになりながら、私は必死で自分を立て直す。

今は勤務中だ。私情を挟む余地はない。

しつかりしなくちゃ！

私はしつかりと前を見据える。

涙が溢れてしまわないように・・・

仕事を終えた私は、急いで部屋を出た。

心の中にはまだ消えないわだかまり。

涉くんと同じ空間にいるのが辛くて、早く逃げてしまいたかった。

走って駐車場に停めていた車の中に滑り込むと、堪えていた涙が一気に溢れ出してきた。

私は声を殺して泣いた。

誰にも泣き顔を見られないように、ハンドルに顔を伏せて。

どれくらいそうしていただろう。

コンコンと窓にノックの音がして、私はハッとして顔をあげた。

涙でぐしゃぐしゃの顔を掌でぐいつと拭いて音のした方を振り返ると、心配顔の由美が立っていた。

由美は、ドアロックはずして、とゼスチャーで訴える。

私が頷いてロックを解除するのを待って、由美はドアを開ける。

「どうしたの、美和子？てつきり寝不足でへばってんのかと思ったんだけど、どうやらそうじゃあないみたいね。」

由美は形のいい眉を寄せて私を覗き込む。

「由美・・・」

べそをかく私を見て、由美は何かを悟ったように言う。

「私でよかつたら話しくけど。」

由美のぶつきらばうただけど優しい言葉に私が小さく頷くと、由美は助手席に乗り込み、ドアを閉めた。

私は頬を伝う涙を拭いながら、今までの出来事を順を追って由美に話した。

「なるほどね。で、美和子はどうしたいの？」

由美は悪戯っぽい瞳で問いかける。

「わからない。」

私は首を横に振った。

「自分の気持ちかわからない・・・」

涙で詰まる声を精一杯絞り出す。

すると由美は、少しあきれたような顔をして笑った。

「嘘つき。ホントはわかってるくせに。」

「ん・・・」

「美和子って昔っからほんと、意地っ張りね。」

由美はまっすぐ私を見つめてにやりと笑う。

「美和子が言わないんだったら私が言っただけよ？美和子はね、高木君が自分以外の女の子からチョコをもらったことに嫉妬してるのよ。高木君のこと、独り占めしたいと思ってるの。それだけアイツのことが好きなの。」

由美はそこまで一気に言っ

「さあ、どうするの？美和子！」

改めて問いかける。

「まだ言わないつもりだったら、私が答えを全部言っただけでもいいのよ。でも・・・」

自分の中で答えは出てるんですよ。と由美はウィンクして見せた。

「うん・・・頑張つて、チョコ作って、高木君に、渡す。」

小さな声で呟く私に、由美は満足そうに言う。

「私が言わなくても、ちゃんと答え、出てるじゃない。」

由美の顔に安堵の笑顔が浮かぶ。

「由美、ありがと。ごめんね、心配掛けて。」

私は由美の瞳をまっすぐ見る。

「ふふふ。黙つてようかと思つたけど、高木君があの子達からチョコ貰ったの見てたんだったら、美和子にいいこと教えてあげる。」

由美は悪戯っぽく笑うと、高木君には私が言つたつてこと、内緒にしててよ。と前置きしてから続ける。

「あのねえ、高木君、断つたんだつて。チョコ貰うの。例え義理チョコでも、大切な人に申し訳ないからつて。」

意外な事実を知らされて、私はついさっきまで泣いていたのも忘れてきよとんとしてしまう。

「でも、あの子達がなかば強引に渡したつてわけ。まあ高木君って優しいから断りきれなかったみたいだけど。」

大切な人つてのがどこの誰のことかつてのは言わなくてもわかるわよねと、由美は私を冷やかす。

私は体中の血液が一気に逆流したような気がした。

頬が熱くなって、めまいがした。

そんな私の気持ちを知つてか否か、それにしても、と由美は飄々と呟く。

「美和子があんなに泣くななんて。そうとう高木君にハマってるのねえ。」

そう言うと、由美は腕時計をみて、やっぱーい！と焦った顔をする。

「早く戻らなきゃ。まだ仕事終わってないのよねえ。」

由美は深々と溜め息をつく。

私はびつくりして由美を見る。

「由美、仕事終わってたんじゃなかったの？」

私の問いかけに、由美は小さく首を左右に振る。

「ううん。実は、本庁に戻って来る直前に千葉くんからメールがきてさ。美和子が帰っちゃって高木くん、落ち込んでるから、私から美和子の気持ちを聞いてみてくれないかって。だから、本庁に着いたら美和子に電話でもしてみるかって思ってたら、まだ車があるのに気付いて。で、おかしいなあと思って覗いてみたら・・・」

「私がいたってわけね。」

由美はゆつくりと頷く。

「びつくりしたわよお。帰った筈の美和子が車の中でぐったりしてるから。まさか泣いてるなんて思わなかったし。」

由美は少し苦笑を浮かべて私を見る。

「ははは・・・ごめん。」

私は指先で頬を掻きながらうつむく。

それを見て、由美は何かに気付いたように少し目を見開き、すぐに目を細めて笑った。

「その仕草、高木くんにそっくりね。」

由美にからかわれて、私は顔が赤くなるのがわかった。

「ち、違いわよ！そんなじゃないってば。」

大袈裟に顔の前でひらひら手を振って否定する。

でも、慌てれば慌てる程、墓穴を掘っていることに気付いて、少し首をすくめて口を尖らせる。

「しょうがないじゃない。いつも一緒にいるから移っちゃうの！」

由美は両手を胸の前であわせると、

「はいはい。ご馳走さま。確かに高木くんと美和子って、仕事でもプライベートでもいつも一緒だもんね。しかもラブラブだし。」
と、冷やかすように私を見る。

「ちよっ・・・ラブラブは余計よ！」

恥ずかしさでムキになる私に、

「事実なんだからしょうがないでしょ。私は嬉しいわよ。親友が幸せでいてくれるのは。」

由美はさざりと言う。

「由美・・・」

私が親友の言葉に感動を覚えたのも束の間、

「だあって。美和子ってば、普段は付け入る隙を与えないって感じだけど、高木くんのことになると、まるで子供なんだもの。からかいがあるわあ。」

由美が私の頬をツンとつつく。

「由美い」

私の低い唸り声を聞いて、由美は慌てて手を左右に振ると、

「じよ、冗談だってば。あ、私、仕事戻らなくちゃいけないから行くね！」

と、そそくさと車を降りる。

そして、ドアを閉める直前、ちらりと車内の私を覗き込む。

「美和子。変な意地張ってるって後悔するわよ。高木くん、美和子のチョコ待ってるんだから。」

「わかってるわよ。由美を見送ったら、速攻でとんで帰ってチョコ作るつもりだから。」

わざと由美から視線を外してぶっきらぼうに答える。

「じゃあいいけど。ほら、私が安心して美和子のこと任せられるのは、高木くんしかいないんだから。ちゃんと渡すのよ。チョコ。」

由美は眩しいくらい笑顔で言う。

私は少し目を細めて笑顔を返す。

「ありがとね、由美。」

由美は小さく頷くと、

「じゃあ今度新しくできたカフェのデザートバイキングは美和子の奢りね。」

と悪戯っぽくウインクする。

「あ、それと。」

突然由美は少し険しい顔を見ると、咎めるような口調で言う。

「わかってるでしょうけど、いくら美和子でも、プライベートでのスピード違反は減点よ。早く帰りたいのはわかるけど、安全運転でね！」

さすがは交通課勤務の婦警だけあって、びしっと念押しされてしまった。

「わかってるわよう。」

私が苦笑混じりに答えると、

「わかればよろしい。それじゃあ頑張ってね！」

笑って手を振ると、由美はドアを閉め、パタパタと走って行ってしまった。

親友の後ろ姿を見送りながら、小さく「さんきゅ」と呟くと、私はエンジンのかけた。

さっきまで抱えていたわだかまりは、いつの間にか消え去っていた。私は、晴れ晴れとした気持ちで家路を急いだ。

もちろん、安全運転で。

家に帰ってくるなり、キッチンに立て籠った娘を不審気に見つめる母親をよそに、私は必死でチョコを作っていた。

何とかチョコを型に流し込んで、ふう、と一息つく。

後は固まってくれるのを祈るばかりだ。

固まらなかつたらその時は・・・

ダッシュで近所のコンビニまで走って、一番美味しそうなチョコを物色するしかないわね。

でも、なんとなく上手くいきそうな気がする。

今度こそは・・・

私は、すべてを天に任せた気持ちでキッチンを後にした。

チョコが固まるまでは何もすることが無いので、とりあえず家着に

着替えてごろりとテレビの前に寝転がる。

視線はテレビを追ってはいても、頭の中は涉くんのことदैいっぱいだった。

大切な人、かあ。

私は由美の言葉を思い出す。

涉くん、私のことそんな風に想ってくれてたんだ。

それなのに、私。

馬鹿だなあ。

思わず苦笑してしまう。

ふと時計をみると、もうすぐ10時。

その瞬間、私は大変なことを思い出した。

ヤバイ！私、涉くんにチヨコ渡しに行くこと伝えるの、忘れてた！
慌てて自分の部屋に駆け込み、鞆から携帯を取り出す。

1回、2回、3回・・・

しばらくコール音が鳴って、

「はい、もしもし？」

涉くんの声が聞こえた。

「あ、涉くん？私。」

コール音が鳴ってから涉くんが電話をとるまでかなり時間がかかったことを考えると、まだ仕事かな。

私は周りに声が漏れないよう、少し押し殺した声で問いかける。

「仕事、もう終わった？」

「いえ、まだ・・・一段落ついたのはついなんですが、事件の報告書がまだ残ってまして。あと1時間くらいかかるかと。」

少し焦ったような涉くんの声。

あと1時間か。なんとか間に合いそうね。

私は時計を確認すると、

「そう。わかったわ。じゃあ頑張ってね。」

短くこたえて電話を切った。

そして、肝心なことを伝え忘れていたことに気付く。

しまった！バレンタインデーが終わる前にチョコを渡せそうだとわかって、安心して、思わず電話切っちゃった！

私は自分の馬鹿さ加減に呆れつつ、慌ててメールを送る。

『涉くんの家に着いたら電話ください。美和子』

とりあえずこれでいいか・・・

まさか涉くんがこのメールを受け取った後、頭を抱えていたなんて知らない私は、

「チョコが固まるまでもう少しかかりそうだし、お風呂にでも入ってこようかなあ。」

と、悠長に支度をしてお風呂に向かった。

お風呂から出ると、10時半を少し回ったところだった。

もうチョコ固まってるかなあ。まさか、また失敗したりしてないよねえ・・・？

がしがし頭をタオルで拭きながらキッチンへ向かう。

そおつと型を傾けて、チョコが固まっているのを確認すると、思わず小さくガッツポーズをする。

「やった！固まってる！」

私は頭に乗せていたタオルを放り投げると、急いで仕上げに取り掛かった。

何とかラッピングまでこぎつけて一段落付いた私は、リビングの時計に目をやる。

もうすぐ11時15分。

そろそろ涉くんから連絡来る頃よね。

私は出来上がったチョコを持って、いそいそと携帯を置きっ放しにしていた自分の部屋へと戻る。

着信を確認してみるけれど、まだ涉くんからの連絡は無かった。

私は机の上にチョコを置いて、携帯を取り上げるとベッドに寝転がる。

早く会いたい。

早く涉くんの笑顔が見たい。

目をつぶってその笑顔を思い浮かべた時、

くく

携帯が鳴る。

私は慌てて通話ボタンを押した。

「もしもし。涉くん？」

「あ、美和子さん？俺です。あの、報告書書くのに時間がかっちゃって。それでその、家に着いてからじゃ遅すぎるかと思ったので、先に電話したんですけど。マズかったですか？」

少し慌てたような涉くんの声に、思わず笑みがこぼれる。

「馬鹿ね。そんな訳ないじゃない。」

自然と言葉が溢れる。

「仕事、もう終わったの？」

「あ、はい。なんとか終わりました。今から帰るところです。」

ホッとしたような涉くんの声に、私の『彼に会いたい気持ち』はすでに頂点を越えていた。

「そう。じゃあ家で待ってて。今から支度して、すぐ行くから。」

私は急いで電話を切ると、服を着替える。

鞆の中にさっき出来上がったばかりのチョコを入れると、私は部屋を飛び出した。

その音にビックリしたお母さんが、玄関へと急ぐ私に向かって大声で叫ぶ。

「美和子！こんな時間にどこ行くの？今日は仕事終わったんでしょ？」

私は笑顔で振り返った。

「詳しいことは良くわからないけど、人手が足りないみたいで呼び出しがかかったの。今日は泊まりになるかもしれないから、戸締りしといて。」

私が涉くんのマンションに着くと、涉くんの車はすでに駐車場に納まっていた。

私はエレベーターを待つ時間さえ煩わしくて、急いで階段を駆け上がった。

廊下に出たところで、涉くんが鍵を開けているのが目に入る。

「み、美和子さん！」

涉くんが私に気付いてこちらを見る。

「良かった。間に合って。」

私は涉くんに駆け寄って、小さな声で呟く。

「あ、俺のせいですよ。こんな遅くに来てもらってすみません。俺が美和子さん家に行ったら良かったんですけど。」

涉くんが申し訳なさそうな顔で言う。

「いいのよ。私がか家で待っててって言ったんだから。」

私は小さく首を振る。

「寒いですから、中に入りましょう。俺も今帰って来たところで、暖房も効いてませんけど。あったかいコーヒーでも入れますから。」

涉くんの優しい言葉が嬉しくて、心が温かくなる。

「うん。ありがと。」

私は小さく頷く。

中へ入り、ソファに腰を下ろす。

大きく息を吸い込んで、緊張でこわばる指をぎゅっと握り締め、キッチンへと消えていった涉くんに呼びかける。

「ねえ、涉くん。」

「なんですか？美和子さん。」

涉くんがキッチンから顔を出すのを見て、私は小さく手招きする。

不思議そうな顔で私のところにきた涉くんの手を、少し震える手でそっと包んで、自分の隣に座らせる。

「涉くんに、渡したいものがあるの。どうしても今日、渡したかったの。」

私は鞆の中からさつき出来上がったばかりの小さな包みを取り出す。

「初めて作ったから、美味しくないかもしれないけど……」

精一杯の笑顔で差し出す。

「これってもしかして・・・」

涉くんが驚いたような顔で、私とその包みを交互に見つめる。

「今日はバレンタインデーでしょ。涉くんは私にとって特別な人だから。帰ってから一生懸命作ったの。」

『特別な人』と言っただけで、すぐく恥ずかしくなって、思わず笑う。

「本当は、みんなに配った義理チョコを涉くんに渡すときに、こっそり、仕事が終わってから本命チョコ渡しに行くからねって言おうと思ってただけで、言いそびれちゃって。ごめんね。」

私は小さく首をすくめる。

すると、涉くんは申し訳なさそうな顔で私を見て、

「俺、実は、美和子さんから本命チョコ貰えないんじゃないかと思って、その、美和子さんの気持ち、疑ってしまっただけ。すみません。」

こんなに俺のこと想ってくれてたのに。」

消えそうな声で呟く。

私は、涉くんを不安にさせてしまったことに心が痛んだ。

それと同時に、私からのチョコを本気で待ってくれた彼の気持ちがすごく嬉しくて。

「待っててくれたんだ。」

思わず涉くんの瞳をのぞきこむ。

「私からの本命チョコ、期待してくれてたんだ。」

少し悪戯っぽく聞いてみる。

「ええ。もちろん。美和子さんは俺にとって、一番大切な人ですから。」

彼は即答した。とびっきりの優しい笑顔で。

一番大切な人、かぁ。

涉くんの口から直接聞くその言葉は、私を幸せな気持ちで満たした。涉くん、私にとってはあなたが一番大切な人よ。

口に出して言うのは恥ずかしいから、心の中で呟く。私のこと、こんなにも想っていてくれてありがとう。

だけど、意地っ張りな私は、本当の想いは口にせず、意地悪して言った。

「でも他の子からもチョコ貰ってたくせに。」

「あ、あれはっ。義理チョコですよ。俺は美和子さんさえ俺のことを想っていてくれたらそれでいいんです！あ、そう言えば・・・」
必死で反論する涉くんが、途中で言葉を濁す。

「そう言えば、何？」

私はずっと涉くんに詰め寄る。

「あ、いえ、何でもないです。俺、コーヒーいれてきます。」

あわてて立ち上がり、急いでキッチンに向かう後姿に思わず、

「何よう。私には教えられないって言うの？」

私は叫んでいた。

「すっかり遅くなっちゃいましたね。俺がもう少し早く仕事を終わらせてたら良かったんですけど。すみません。」

いい香りのする湯気をたてたコーヒーを私に手渡し、涉くんが隣に腰を下ろす。

いつもの優しい心遣いに、私はつい意地悪したくなる。

「あら、私は別に構わないわよ。バレンタインデーが終わる前にちゃんと涉くんチョコを渡せし。それに、今日は泊まっていくつもりだから。」

「えっ。」

一気に涉くんの顔が耳まで真っ赤に染まる。

「お母さんには事件で人手が足りないみたいだから、今日は泊まりになるかもって言って出てきちゃった。」

涉くんの焦る顔がおかしくて、思わず笑ってしまう。

「覚悟しときなさいよ。さっきの続き、絶対吐かせてやるんだから。」

私は涉くんの真っ赤な頬にそっとキスをした。

（後書き）

佐藤刑事バージョン、いかがでしたか？
楽しんでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2611f/>

すいーとばれんたいん～MIWAKO'S SIDE～

2010年10月9日19時10分発行